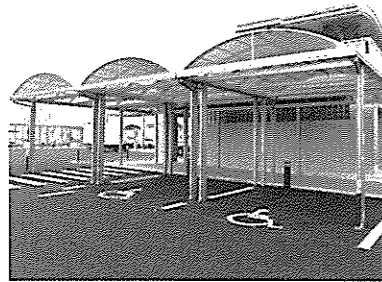


鹿児島島のいろいろな建物や施設、あるいは人の心の中にあるバリアが取りはられています。一人ひとりが、より快適で自由な暮らしが営めるように。

バリアフリー～最前線

Barrier Free-Saizensen



駐車場の段差がなく、乗り降りが楽



商品陳列棚が低く、車椅子の方にも便利。



車いすの方でも簡単に利用できる自動販売機



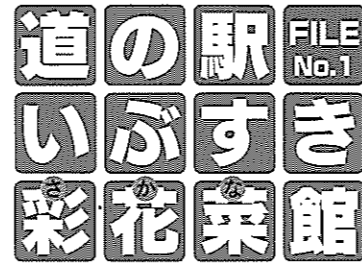
車いすの車輻だけ段差をなくした試み



横断歩道内の視覚障害者誘導用ブロック

●ドライブの途中、ちよつと休憩という時に便利なのが道の駅。年間300万人が訪れる南薩摩の玄関口に昨年秋オープンした道の駅いぶすき「彩花菜館」は、眺望の良さとともに、バリアフリーの面でもとても行き届いている。まず、入口に大きくゆつたり設けられた障害者用の駐車スペースは屋根付きになっており、雨天の時傘をさせない車いす使用者にとってありがたい。野菜などの商品の陳列もやや低めに

眺望絶景、南薩の玄関口



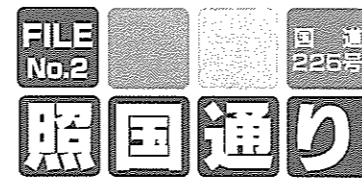
指宿市小牧52番地4
TEL 0993-27-9022



展望所へ向かうスロープ

年齢にとって見やすく、かつ手に取りやすい。別棟のトイレには、大人用おむつ替えベッドを備えた多機能トイレが2つ用意されているほか、一般用には、オストメイト専用の便房もある。屋外に並んでいる自動販売機はコイン投入口が低くなっていて、車いすのまま利用できる。スロープや手すりも備わった展望所からは、眼下に広がる錦江湾の絶景を楽しむことができる。●

人にやさしい道づくり



緑石の段差を無くし傾斜をゆるやかに



生まれ変わった照国通り

●鹿児島市の中心部、中央公園から鹿児島三越までの一般国道226号は、通称照国通りと呼ばれている。通りの両側には商店が並び、人通りも車の往来も激しい。そこで、国土交通省鹿児島国道事務所では、障害者の声を活かしたバリアフリー化に取り組んだ。工事に入る前に、身体障害者団体や鹿児島盲学校の生徒さん等の協力をもらって、実際に現場やバリアフリー体験場で実体調査を行った。その結果、車いす使用者は2センチの段差でも登るのがきつい。視覚障害者は段差があるとつまずきやすい。しかし、緑石には勾配があつた方が車道と

歩道の境界を判断しやすいということがわかった。そこで、縁石部分の段差をなくし、緩やかな勾配をつけた。また、歩道が傾いていると、車いすでの走行がむずかしいので、極力平坦に。横断歩道では誘導用の点字ブロックを設けるとともに、歩道のガタツキをできるだけなくすために自然石の目地段差を少なくした。その他にベンチの設置や標識支柱を減らすことによつて、人にやさしい街並みとなった。●

身近な情報をリアルタイムで

グループ「さんた」は、聴覚障害者3名と健聴者4名で構成された異色のグループ。発足は2003年5月。聴覚障害者にとつて身近な行政のシステムやサービスについて、メンバー自ら調査して、そこで得た情報を、ホームページなどを通じて広く提供している。「聴覚に障害があることで、必要な情報がうまく伝わってこないことにもどかさを感じていた。自分にとって必要な情報は、他の聴覚障害者にとつても必要なもの。その情報を自らリアルタイムで提供できれば…」聴覚障害者を持つメンバーのひとり徳永勉さんは設立のきっかけを語る。忙しい仕事の合間を縫つてひと月1回のペースで集まり、活動を続けている。小さなグループだけに小回りのきくネットワークが強みだ。



グループ「さんた」 <http://www.santa.join-us.jp/index.htm>

わからないことを、どんどん解決していこう!

人との出会いの中に解決する糸口があります。



手話通訳者を介して、いろんな疑問をぶつける



丁寧な対応に感動することもしばしば

調査から問題解決方法の提案まで

グループ「さんた」の活動は、疑問に思つたことを取材するだけにとまらぬ。発足した2003年は、8・6水害から10年目の年。徳永さんが住む旧松元町の防災システムについて取材することに。聴覚障害者にとつて、防災無線を使った連絡だけでは情報は伝わらない。高齢者や独居者などがマージングされた防災マップによつて災害があれば連絡がいく仕組みがあつたものの、障害者については十分に状況を把握できていない現状を知る。そこで、徳永さんたちは、ブライパシーの問題はあるものの、災害時の対応のひとつとして、防災マップのマークに障害者も加えることを提案した。

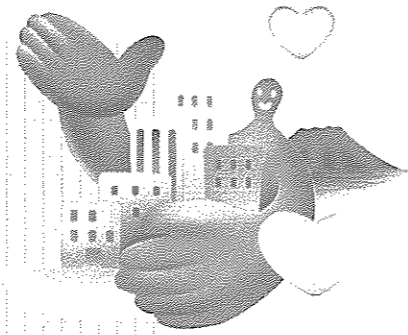
知りたいことは、いっぱい

その他にも、聴覚障害者が事件や事故にまきこまれた際の緊急通報システム「メール110番」や、聴覚障害者の運転免許更新に関する取材も行った。メール110番に関しては、調査後にメンバーの一人が交通事故に遭い、県内で第二のメール110番通報利用者になったというエピソードも。取材の基本は、関係機関に出向き担当の方と直接お話をすること。丁寧な対応に感動することもしばしば。こうした活動を通して、人とのいろんな出会いの中で、問題解決の糸口があることがわかった。また人と人のネットワーク作りの大切さも学んだ。「わからないこと、知りたいことはまだまだいっぱい。あちこち出かけて行きたい。」グループ「さんた」の活動は続く。

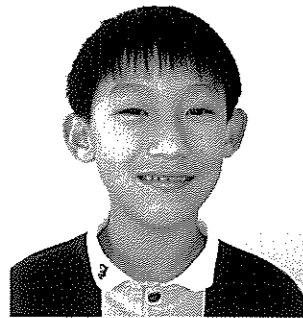


運転免許更新時の聴力試験も取材

鹿児島県からのお知らせ



平成16年度「心の輪を広げる体験作文・小学生部門」において内閣総理大臣賞に入選した岩元恕文さん(池田学園池田小学校5年生)の作品を紹介します。



いわもと ひろふみ
岩元 恕文さん
池田学園池田小学校5年(当時)
「自閉症はなかなか知られていなくて、弟も苦労したし、何とかならないかな、世界の人に知ってもらえたら…」が今回の作文を書くきっかけになった。

ぼくの弟

「いやあああつ」と、金切り声で叫ぶと、弟は天文館の交差点に、仰向けにひっくり返って、泣き始めた。あつという間に人だかり。弟を、そしてぼくたち家族をかわるがわる見つめる顔・顔・顔。「こんなに泣いている子どもをどうして、放っておくんだらう」というような目。

ぼくたち家族を襲った「人の目地獄」。暴れる弟の理由を知らない人から「親の教育が悪い」と思われているのか冷たい視線を感じる。

ぼくの弟は、自閉症である。自閉症とは生まれつきの障害で完全に治ることはないそうだ。弟は、見たり聞いたりすることや感じることを普通の人と同じように理解することができない。このため、人と関わることや自分の気持ちを相手に伝えたり相手の気持ちをくみ取ったりすることがとても苦手なのだ。ただ、おとなしくしていると見た目が普通なので、ほかの障害者と比べて理解してもらいにくい。

そんな時、ぼくは思わず弟の手を引っ張り上げようとした。けれど、こうなってしまった弟の力は普通の何倍にもなる。まるで、地面に吸い付いた吸盤のようだ。妹も手伝ったが、弟の体は一向に動こうとしない。あきらめたようにお母さんが弟を抱きかかえた。それからぼくたちは、「泣き叫び地獄」の中にいた。歩くとたびに、「ワーワー、ギャーギャー」と泣き叫び続ける。だまったまま人のいない通りまでたどり着いたぼくたちは、へとへとになっていた。お母さんは、今にも泣き出しそうだった。

休みの日曜日。弟の大好きなおばあちゃんが用事で外出することになったので、弟の気を紛らすためにでかけた。最初はデパートのおもちゃ売り場でおとなしくしていたのだが、おばあちゃんがいなくて気がついたあ

とはどうにもならなくなってしまった。弟は、いつも一緒にいるおばあちゃんがいなくてパニックになる。お昼ごはんを食べるために入ったレストランでも大きな声を出すので、お母さんがハンカチで口を押さえていなければならなかった。ぼくたちは、レストランの人に、「何かあったのですか」と聞かれ、あわてて食事をする事となる。

けれど、ぼくはそんな弟が好きだ。何たって、弟はすごい。自閉症者は何かと並外れて発達していると言われていいる。それは気づきにくい特技といった方がいいのかもしれない。弟はビデオデッキの使い方を見ただけで覚えたのだ。しかも、それが四、五才の頃のことだから驚きだ。また、その後も、パソコンの起動の仕方など、様々なことをたいてい、二回で自分で覚えてしまう。

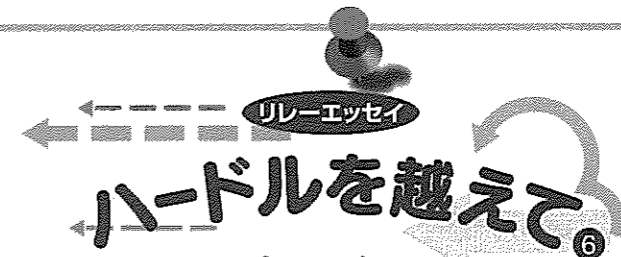
感情を出すのが苦手といわれている自閉症者だが、弟の笑った顔は最高にかわいい。そんな弟を見て、「自閉症者だって自分の感情を出せるんだ」とぼくは自信を持ていえる。時々、大声で奇声を上げて周りを困らせる弟がいるかと思えば、最高の笑顔でぼくをほのぼのとした気持ちにさせてくれる弟がいる。どっちもぼくにとっては世界にたった一人の本物の弟だ。

ぼくは自分の気持ちを言葉や文字にして人に伝えることができる。しかし、弟にはそれができない。言葉が話せても、文字が書けても、意味のない言葉の繰り返しだったりする。

今、ぼくが弟のためにできることは何だろうと考えることがある。それは、一人でも多くの人に自閉症のことを知ってもらいたい。そのような障害を持って生まれた人への理解を深めてもらいたいと思う。ぼくは弟に代わってその気持ちを言葉や文字で伝えることから始めていきたい。そして、誰に向かっても「ぼくの大事な弟です」と胸を張って言いたいと思う。

県では、障害者に対する県民の皆さんの理解を促進し、障害のある人に対する「心の壁」を取り除くための啓発広報として、内閣府との共催により毎年「心の輪を広げる体験作文」及び「障害者週間(旧障害者の日)のポスター」を募集しています。

<http://niceheart.or.jp/sakuhinnsyuu16.html>



田中 仁さん
(鹿児島市)

積極的に自分をアピールしていこう。



高校2年の時でした。大分でラグビーの合同練習をやっていて、私はフォワードのランカーでしたが、上から押しつぶされるような感じで倒れこんでしまいました。体に衝撃がまわり、意識はあるものの感覚がまるでない。自分の手足じゃないような感じで、まわりでは「動かすな、動かすな」と騒いでいました。そのまま病院に運び込まれ手術を受けました。1ヵ月半が2ヶ月くらい安静状態で、脊椎損傷であることも聞かされました。手術しても手足が動かなかったの、これはちょっとやばいかなと。それから鹿児島に転院し、霧島の方で3年半ほど入院しました。その後、大分の別府重症障害センターというところで4年ぐらいいリハビリに励み、日常生活に必要なことを訓練しました。その頃は日本中がバブルで景気が良く、高校時代の友だちもキラキラしていて、ちょっとうらやましくもありました。

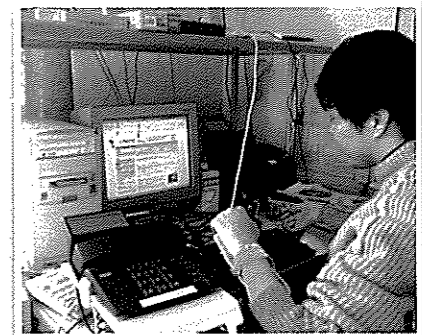
いずれ自分も何かやらなければならないし、絵を描こうが文を書こうがパソコンは使いこなせないといけないということで、本格的に習いました。ワープロ検定を受け表計算ソフトなども使いこなせるようになり、鹿児島へ帰ってきました。24歳の頃ですね。それから、神戸の会社に自分を売り込んで在宅勤務をした後、現在地元のインターネットプロバイダーであるシナプスに就職し、ちょうど7年になります。現在ホームページの管理を主に行っており、週1回会議で本社へ出向く以外は自宅で仕事をしています。ブロードバンドなど通信環境もずいぶん良くなり、データのやりとりはモスロン、カメラとマイクをつなげばリアルタイムでテレビ電話みたいな交信もできます。障害のあるなしに関わらず、自分の技術をどんどんアピールしていかなければならないと道は開けません。私も今までいろいろお世話になったぶん、できるぎりのお手伝いをしていきたいですね。

●田中 仁さん

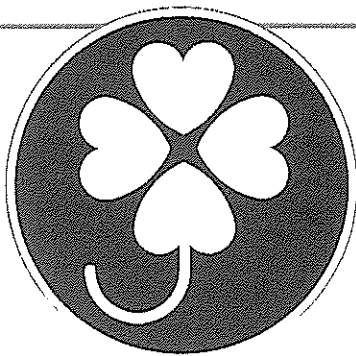
鹿児島市生まれ。
中学時代は野球部に所属、鹿児島工業高校でラグビーを始め、2年生の時に脊椎損傷に。今はパソコンの技術を活かしシナプスを運営する(株)グッドコミュニケーションズのWebチームリーダーとして活躍中。



外出の際は奥様の運転で



在宅勤務でホームページ更新

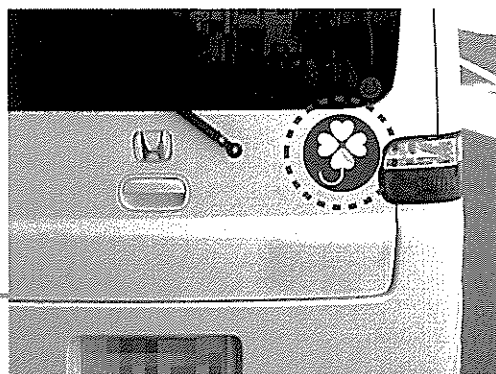


Q1 このマークを貼っている車を見かけるのですが？

A 「クローバーマーク」とか「四葉マーク」と呼ばれていますが、正式には「身体障害者標識」と言います。このマークは「肢体不自由であることを理由に、免許に条件を付されている」人が運転する自動車であることを示しています。

Q2 どんな配慮が必要ですか？

A クローバーマークの車を見つけたら、急な割り込み、急なブレーキ、後ろからあおる運転など慎しみ、思いやりのある運転をお願いします。



福祉のまちづくり広報誌 ありば

VOL.9 平成17年3月31日発行

「バリア」の逆は「ありば」。

バリアフリーな社会を築くために、本誌はバリア反対!の意を込めて、

「ありば」というタイトルにしました。

みんなに住みよいまちを、みんなで築くために。

人と人のバリアフリーコミュニケーションをご紹介する広報誌、

それが「ありば」です。

[感想をお寄せください]

鹿児島県保健福祉部障害福祉課

〒890-8577 鹿児島市鴨池新町10-1

TEL.099-286-2111(内線2743) FAX.099-286-5558

[E-mail] shougai@pref.kagoshima.lg.jp

[URL] <http://www.pref.kagoshima.jp/home/shogaika/fukumachi/fukumachi-top.htm>

営利を目的とする場合を除き、この本をそのまま読むことが困難な方のために、「録音図書」「拡大写本」等の読書代替物への媒体変換を行うことは自由です。製作の後は上記障害福祉課へご連絡ください。

視覚に障害を持つ方のために、本誌の点字版及び録音図書を鹿児島県視覚障害者情報センター(鹿児島市小野一丁目1-1 ハートピアかごしま3F TEL.099-220-5896)に備え付けてあります。